

『想像的肖像』とワイルドの童話

西垣千明
(玉川大学教授)

ワイルドは「知的概念に感覚的環境を与えるということはペイターの最近の作品のおかげによるものと感謝したい」と1887年の *Pall Mall Gazette* で述べている。この「最近の作品」とは『想像的肖像』を指し、とりわけ「自己実現」の物語として「セバスティアン・ファン・ストーク」を挙げている。ワイルドは『幸福な王子』の構想を1885年には持っていたが、実際には1888年に出版し、『ざくろの家』が1891年に出る。「セバスティアン・ファン・ストーク」が1886年の作であることや、共に「自己消滅形」の愛の表現があり、エルマンもそこに「ペイターとワイルドの究極的同一性を見せる」と言う。この両作品の相関概念は払拭できないものがある。そこで次の三点にスポットをあててみた。

1. 異教とキリスト教

『想像的肖像』の一連の物語は丁度ガリラヤの冷たい息によって破壊されたものを奪い返えそうとする異教の世界があるようである。例えば「ドニー・ローセルワ」の話はステンドグラスやタペストリのデザインからとび出て来る。主人公はオーセールの人とは違った優美さがあり美しい付属品を身につけた異教的の姿をしていたが、「苦しみさいなまれた人の表情」があった。彼は群衆に追跡されついに死に至り「心臓」だけが大聖堂の十字架の下に埋められる。「若い王様」の主人公「若い王」は宮殿から雲隠れし、一人でアドニス像を刻んだギリシアの宝石に魅惑され、青銅に刻まれたナルキッソスに見入り、きらびやかな装飾品にあこがれるが、その裏にある抑圧された「悲しみ」を夢によって認識する。そこで自分の王としての姿を否定し、貴族の反抗にあい、自己を全うすることに気づいた時キリスト像の前で天使の如く転身する。ペイターはキリスト教世界に埋もれた異教の世界を童話に劣らず幻想風にモザイクのように描く。ワイルドは異教の世界に逸脱しながらもキリスト教世界への反転を繰り返す王様のキリスト教へ転身する姿をモノクロームのように描く。このように両者はキリストの十字架への回帰で終結する。

2. 集団と個

審美主義の芸術家は個人的で個性的になることはペイターの『ルネッサンス』の中での基本的思想である。『獄中記』においてはその極致に達し、キリストを个性的で芸術家であると極言する。「若い王様」、「幸福な王子」、「すばらしいロケット花火」、「我が儘な巨人」、「忠実な友」のそれぞれの主人公は「自己実現」を果たし、真のソーシャリストと

なった時はじめて神意にかなった人間となる。集団から離れたつばめ(「幸福な王子」)、モラルの話をも嫌む独身ねずみ(「忠実な友」)も社会的集団との関わりにおいて描かれている。「ローゼンモルトのカール公」では「若い王様」の如くカール公は常識の故に停滞した宮廷から離脱する。そして廷臣をあざむいて、自分に対する人々の常識的対応を試そうと、生きながらにして自分の葬儀を出し、変装して自分の棺の後をつけてみたが、耳にしたのは「こんな雨降りに棺の中にいるものは幸せだぜ」という老人のぼやきであった。この常識の欺瞞をパロディ風にして、カール公の突飛な行動に逸脱した個人主義をみせている。彼は恋人と共に迫り来る軍隊の中へと突入して終りをとげた。この主人公の啓発は成就され、後のゲーテのような精神に満たされ、その魂は“Resurgam”という言葉によって表出されたのである。「若い王様」のように個人的自己実現を通した、ヘレンのギリシア的な「復活」であった。

3. 子供と大人の世界

ペイターは「ドニー・ローセルワ」の冒頭で黄金時代の伝説が「我々の所に帰ってくることにもし子供の意識また無意識を取りもどし、すべてを巧みに受け入れることがなければどんな益があるのか」と前置をし、ディオニュソスの話を空想的かつ幻想的に孵化し、子供らしい現代への移籍をしたが、ワイルドは *Pall Mall Gazette* の編集者による質問に対し「彼は愚かな質問から始めている。つまり私がこの本を楽しみます目的で書いたか否かという質問です。私はかなり教育のあるどんな人にもこのような疑いを抱かせるなど、つゆ思ってもいなかった」と答える。ワイルドはペイターの前の言葉のように無意識の童心になりきって語っているのでパロディやアイロニーの入った会話も子供には違和感のないものであり、むしろ神の領域に関する理解は子供の世界であったのではなからうか。大人としての解釈に依存する所は間歇的に出現するが、『想像的画像』の中では逆に子供の発想をもって理解し得る部分も間歇的に点在する。「話すことの方が行くことの方よりずっと難しい」(「忠実な友」)とか俗物的となった「幸福な王子」の市長、議員、数学の教師等へのアイロニーはワイルドの中に無意識に流れている思想的源流である。即興性が発揮されればされる程童話に高次の思いが浸透する。ペイターの『想像的画像』ではその文体を除けば、幼児的空想にたちかえることで、そのうつくしい童話的空想に触れられる。ペイターやワイルドより早くニューマンは知性の働きの現象学的な描写を説教の中で巧みに語っている。知性は想像、直観の働きもする。だから論理や知覚で捉えきれない種類の真理に達するに先立ち個人に責任を負うのだと考える。平素からカトリックに改宗の意志があったワイルドは童話を語る人としてその深淵さにおいては、ニューマンが Anti-intellectualism にあったように深く、またルイスのように想像にたわむれることも出来なかった点で無意識に伝統を背負っていた。そんな流れからペイターの想像のように美しい童話を送りだしたのである。